

## <紹介・書評>

杉本 卓洲『ブツダと仏塔の物語』大法輪閣，2007年，262頁，2,205円

森 雅秀

仏塔研究の第一人者による待望の好著である。同じ著者の代表作で、すでに古典的名著となっている『インド仏塔の研究』（平楽寺書店、1984）が刊行されたとき、学界に与えた衝撃は今なお記憶に新しい。刊行当時、まだ大学生だった評者の個人的な体験であるが、恩師のひとり宮坂宥勝先生が、同書を手に教室に入ってきてこられ、「こんな研究が最近出ましたよ。仏教研究の新しい流れですね」とおっしゃったことを、鮮明に記憶している。事実、文献学ばかりではなく、考古学や美術史の資料などを駆使した同書の方法論は、評者も含め、同じ分野を歩もうとする者たちの規範となって、今日に至っている。

その同じ筆者によって、仏塔を主題に一般向けに著されたのが本書である。『ブツダと仏塔の物語』という表題どおり、単なる仏塔の紹介ではなく、仏塔を中心にインド仏教の全体像を描き出そうとする意欲作である。それは以下にあげる本書の構成からも、十分、読み取れるであろう。

### 第一部 仏塔の始まり

第一章 ブツダの涅槃と葬儀

第二章 舍利八分伝説の検証

第三章 仏塔の原語

第四章 仏塔の起源

第五章 仏塔の構造と供養法

第六章 仏舍利塔以前の仏塔

### 第二部 仏塔が語るもの

第一章 仏塔は地上の楽園

第二章 仏塔の支持層

第三章 彫刻・彫像の伝えるもの

第四章 ジャータカと菩薩

### 第三部 仏塔の広がり

第一章 西北インドの仏塔  
第二章 南インドの仏塔  
第三章 西インドの塔院窟  
第四部 仏塔信仰の深まりと変容  
第一章 大乘仏教と仏塔崇拜  
第二章 部派仏教と仏塔崇拜  
第三章 仏塔の変容

それぞれの内容を簡単に紹介しておこう。第一部では仏塔の始まりから筆を起し、その語源や起源をたどった後、仏塔の具体的な構造や供養法を明らかにする。この部分は本書の導入の役割を果たしている。「仏塔が語るもの」と題された第二部は本書の中核にあたり、仏塔が意味するもの、仏塔を生み出したインドの世界観、仏塔を支えた人々の信仰、そして仏塔の周囲に置かれた彫刻の意義などが、つぎつぎと解き明かされていく。

とくに、仏塔の欄楯装飾に見られるジャータカの浮彫については、物語の具体的な内容が巧みな筆致で語られていく。筆者はジャータカ研究でも大きな成果を上げているが（たとえば『菩薩：ジャータカからの探求』平楽寺書店、1993）、インド各地のジャータカ図を知り尽くした筆者ならではの詳しい考察が披瀝されている。本書には全体を通じて、百点もの写真図版が掲載されて、読者の理解を助けているが、とくにこの部分は図像を読み解く楽しみを十分味わうことができる。

第三部では視点を変えて、インドやその周辺地域に見られるさまざまな仏塔が取り上げられる。読者はここで、西北インドからパキスタンやアフガニスタンにまたがるガンダーラ地方、南インドのアーンドラ地方、そして西インドのマハーラーシュトラなどにおいて、仏塔が独自の展開を遂げたことを目の当たりにする。それぞれの代表的な遺跡や遺品を通じて、各地域の仏塔信仰の独自性が示され、仏教の信仰や文化の多様性が浮彫にされる。

最後の第四部「仏塔信仰の深まりと変容」では、仏塔信仰をさらに広い文脈から扱う。はじめは、いわゆる仏塔信仰の大乘仏教起源説が取り上げられる。かつて、平川彰氏が提唱し、日本の仏教学者を席捲したこの説は、仏塔を信仰する在家の人々が大乘仏教の成立に大きく関与したとするものであるが、近年ではかなり力を失っているようである。それは、G. ショベンのような海外の研究者によって論破されたためであると語られることが多いが、実際は筆者をはじめとするわが国の仏教学者たちによる地道な研究に負うところが大きい。とくに、仏塔を支えた人々を、文献資料や碑文から解き明かした筆者の研究は、その中核をなして

いる。

その一方で、大乘仏教のさまざまな経典で、仏塔信仰のあり方が大きく異なることにも注意が向けられている。たとえば、代表的な大乘経典である『般若経』と『法華経』は、いずれも仏塔を重視する立場をとるが、仏塔の持つ意味は大きく異なり、それが各経典を生み出した人々の仏陀観や信仰のあり方を明確に示している。

同じようなことは部派仏教についてもあてはまる。多くの部派が仏塔信仰を重視したことはあまり知られていないが、場合によっては、大乘仏教以上に仏塔を信仰の要としていたことが、ここでは明らかにされている。

最後に、ジャイナ教の仏塔信仰という、これまでほとんど紹介されたことのないテーマが取り上げられ、また、密教の時代の仏塔信仰から、ネパールやチベット、そして日本の仏塔への直接のつながりが示され、インド仏教という領域を越えた仏塔信仰の広がりが示される。

以上、簡単に紹介したように、本書は仏塔とそれに関わるさまざまな事象を、幅広い視野でとらえた優れた成果である。一般書の体裁をとりながらも、この分野の最新の成果がふんだんに盛り込まれ、豊かな内容を持つ。その特徴をあえてまとめるならば、次の三点があげられるであろう。

第一に、仏塔を中心としてインド仏教の大きな流れが提示されていることである。ひと口にインド仏教といっても、釈迦の時代から、部派仏教、大乘仏教、そして最終的に密教にいたりインドから滅びるまでには、短く見積もっても1700年の時代の幅がある。その中には多様な「仏教」が含まれるが、仏塔はそれを貫く柱となる。おそらく仏塔以外には、そのような信仰の対象は存在しないと言ってもよいであろう。仏陀観や仏身論、救済論、コスモロジーなどは、いずれも仏塔を抜きにしては論ずることはできない問題である。仏塔の歴史はそのまま仏教の歴史になるのである。

第二に、文献資料に基礎を置きつつも、考古学や美術史、碑文学などのさまざまな資料を駆使したきわめて学際的な研究であることがあげられる。これは『インド仏塔の研究』以来の筆者の一貫した立場であり、本書にもそれが存分に発揮されている。このような研究は見かけほどたやすいものではない。よく見られるのは、文献資料に欠けている情報を他の分野で補うという手法であるが、それでは用いる資料の取捨が恣意的になる。しかし、筆者の場合、そのようなおそれはみじんもない。文献についての十分な知識に裏打ちされているため、読者は安心して読み進めることができる。

第三の特徴は、専門性が高く高度な内容をもちながら、本書が一般の読者に向けてきわめて平易に書かれていることである。「あとがき」によれば、本書は北陸工業新聞社発行の「建設工業新聞」に掲載されたものが、短縮・修正されたものであるという。仏教ともインドともほとんどつながりのない業界紙に掲載されたことも、本書の近付きやすさに寄与しているのであろう。普通、仏教学者による仏塔の研究は、理念的、思弁的になりがちなのであるが、本来、考古学や建築学こそがその基礎をなしているはずである。本書の扱う対象が、きわめて具体性に富んでいるのもそれを反映している。おそらく、初出の業界紙への掲載時から、読者の好評を博していたであろう。

もっとも、書き下ろしではなく、決まった字数による連載であったことが、マイナスになったことも否定できない。加筆や修正が行われたことはもちろんであるが、それでもいくつかのトピックに関しては、内容的に必ずしも十分な展開が図れなかったところも見受けられる。また、通読した場合、前後のつながりに緊密な関連の認められない部分もあり、ひとつの結論にむかって収斂しない章が多い。

さらに気になるのは、仏塔が持っていた社会的な機能や、場合によっては政治的な役割について、ほとんど言及されていない点である。たとえば、釈迦の涅槃の後、仏塔が建立されたのは、よく知られているように、転輪聖王の葬儀の方法になったものである。しかし、それは古代インドの理想的な帝王に、悟りを開いた釈迦が匹敵するという理念的なものではなかったはずである。仏塔信仰は舍利信仰にも大きく重なるが、日本では舍利と王権が結びつき、仏法が王法すなわち天皇による国家統治のイデオロギーになったことは、日本史ではむしろ常識である。このような統治理念としての仏塔信仰の起源は、おそらくインドにまでさかのぼると考えられるが、本書の中ではほとんどふれられていない。わずかに、アショーカ王に関する記述で、「仏塔の建立や修復、「仏塔まつり」の実行は民心を収攬し、国家統一に導くために役立ただろう」と述べられているにすぎない。仏教や仏塔信仰がどのようにそれを実現させたかを、具体的に示してほしかった。

インドの仏塔信仰に関する疑問として、もうひとつ加えておこう。仏塔は仏教の教理にもとづくだけではなく、当時の人々の重層的な信仰を背景にしていることはよく知られている。本書でもヤクシャやヤクシニー、樹神などの仏塔のまわりの彫刻を紹介しながら、それを詳述している。しかし、評者自身も授業などで同じように説明しつつも、そこに現れる豊満な肉体を誇示する女性像や、男女の

愛の喜びを表現したミトゥナ像などが、どうして仏塔の装飾としてあえて選ばれたかは明確にできない。最も重要な戒律のひとつである淫戒と、このような女性像やエロティックな像が両立し得ないからである。本書の中でもこれらの点について取り上げられているが、律の文献の中で規定されている「男女の和合の像は〔仏塔の装飾からは〕除くべき」という条項があることが紹介されているものの、それが守られなかったことの原因は示されていない。

書評という性質上、気になる点を若干指摘したが、本書が仏塔を中心としたインド仏教研究の優れた成果であることは疑う余地がない。これから仏教の勉強をはじめようとする大学生や、仏教に関心を持つ一般の人たちをはじめとして、学際的な研究を進める研究者にまで広く薦める格好の書である。